

大学史編集委員長のころ——故早川幸男前学長への追憶より

前編集委員長 加藤 延 夫

平成二年一月、江藤恭二教育学部教授（当時）から名古屋大学史編集委員長をひきついだ。江藤教授が学生部長に就任されることになったのが主な理由であった。もう一つの理由としては、同編集委員会の最初の仕事であった『名古屋大学五十年史 部局史』（全三巻）がその前年の十月に刊行されており、委員長交代の時期としては良い区切りで、次の仕事である写真集の刊行は新しい委員長のもとでやろうということもあったように思う。

江藤前編集委員長は名古屋大学史編集室の室長も兼ねておられたが、私の場合は居所が鶴舞キャンパスで離れているために、編集室長として篠田弘教育学部教授にお願いすることになった。昭和六十年度の編集室発足から専任編集室員として全学教官欠員流用により助手一名が配置されていて、最初井上知則さん（現朝日大学教授）が平成元年三月末まで勤められ、そのあとを勝山吉章さん（現福岡大学助教授）が継いでおられた。お二人ともその職責を果たすうえで能力と情熱において申し分なかった。しかし、編集室に課せられた仕事の量や多様性、要求される時間との闘いなどを考えると、ひとりの専任教官にかかる負担ははかり知れないものがあるように見受けられた。

編集委員長を引き受けて、委員長として先ず為すべきことは何かを自問して得た答えは専任編集室員を少なくとも一名増員することであった。早速、早川幸男学長（当時）に面会すべく秘書室に電話したところ、学長の意向として「わざわざ大学本部まで来てもらわなくても、附属病院で薬の点滴注射を受ける予定なのでそこで会いましょう」とのことであった。早川学長は、その前年、大腸腫瘍摘出手術を受けられ、そのころ術後の薬剤による治療を

定期的に受けておられたのである。約束の日時に外科外来の治療室におられた早川学長を訪問した。ベッドに仰臥して点滴注射を受けながら文献コピーを片手にてかざして読んでおられた。早速「写真集とそれに次いで通史の仕事をおひかえているので、編集室へ全学定員流用を少なくとも一名の増員をお願い申し上げたい」と切り出した。もちろん学長の反応を大いに気にしながらである。学長は淡々と「各部署の執筆予定者のすべてが約束の期日までに原稿を書き上げることが期待することはおそらくできないであろうし、編集室専任教官を増員してその人たちに通史の原稿の大部分を書いてもらった方が早いのではなからうか。助手二名増員でいきましょう」と答えられた。そのうえ「あなたは、からだも小さいし顔つきもやさしいから、各部署の執筆予定者に原稿の催促をして、提出させるのにご苦労があるでしょうね」と、激励とも慰めともあるいはジョークとも皮肉ともつかぬお言葉まで頂戴し、その場を辞した。

難関を突破し小躍りするような気分で、編集室と本部庶務課に連絡し、編集委員会を開催し、評議会への全学教官欠員流用の要望の手続きを進めるよう依頼した。しかし、数週間待っても大学本部から応答がなかった。催促したところ、庶務課からの返事は、学長から何の指示もないので内田弘保事務局長（当時、のちに文化庁長官）に説明に来てほしいとのことであった。「わざわざ学長室へ来なくても病院へ行くからそこで会おう」といわれた学長の言葉に勇気を得て始めた専任編集室員増員の努力も水泡に帰すのかと思いつつ、事務局長室を訪問した。「学長が承認したのになぜ手続きを進めないのか」とやや気色ばむ私をなだめて、温厚な内田事務局長は「早川学長は忘れておられるのでしょうか。学長に尋ねてみますから数日待つて頂けませんか」と答えた。数日後要望は聞き届けられる旨返事があったときは大いに安堵した。

一連の手続きが終わり、専任編集室教官二名が教育学部からその任に就いたのは平成二年四月一日であった。そ

の二名は片岡弘勝さん（現香川大学講師）と吉川卓治さん（現神戸商科大学講師）である。専任編集室員三名体制下で編集室の仕事が加速され『写真集 名古屋大学の歴史 1871-1991』が平成三年十二月刊行された。

写真集作成とともに通史編纂の準備が進められていたが、写真集の刊行によりその準備は本格化した。通史には前史の記述も含められ、明治四年の仮病院、仮医学校の設立から官立移管後の名古屋医科大学に至るまでの歴史がその主要部分を占める。当時図書館医学部分館専門員であった田中英夫さんはかねてより、愛知県公立医学校時代の御傭外国人教師であったアルブレヒト・フォン・ローレツについて広範な研究を行ってきた。田中さんは事務職員の六十歳定年規定で平成三年度末をもって退職することになっていた。しかし、編集室専任教官になってもうることができれば教官の停年である六十三歳まで更に三年間その貴重な能力を発揮して通史編纂を助けてもらえるのではないかと考えた。篠田編集室長及び室員も全面的に賛意を表されたので、このことを実現させるため早川学長のところへ再びお願いにいった。そのころ早川学長は病が進み附属病院に入院中であったので、主治医の第二外科高木弘教授を通じて面会の日時を打ち合わせ、平成三年十二月のある日病室を訪れた。早川学長は病室のソファで待っておられ、お願いの趣旨を申し上げた。学長は「医学史を含め科学史の専門家は少ないので貴重な存在だと思います。助教授ポスト一名の流用を考えましょう」と即座に答えられたときはほうとうに嬉しかった。

しかし、悲しいことに早川学長の病状はその後急速に改まり、二月五日逝去された。編集室へ助教授一名流用の学長との約束は事務局に伝えられることなく、私の脳裏に残る事実に過ぎなくなった。案の定、編集委員会における審議は難航し、一時提案を保留することにせざるを得なかった。思いがけず、平成四年四月一日私は総長に就任することになり、編集委員長は篠田編集室長が兼ねられることになった。この件は篠田委員長から講師席流用という形で編集委員会に再提案された。結局、田中英夫さんが編集室専任教官の職に就かれたのは、私の総長就任後お

よそ半年近くたった平成四年九月十六日であった。

自由に書いて下さいとの編集室からの依頼に甘えて、名古屋大学史編集委員長のころの特に強く印象に残っている出来事的一端を思いだすままここに述べた。くしくも述べた二つのことはいずれも専任編集室員増員のための全学欠員流用についての話になってしまったが、このことを思い出す度毎に故早川前学長の名古屋大学史編纂事業への温かいご理解とご配慮が身に沁みてありがたく感ぜられるのである。それとともに、学長の配慮や意図が実現するには、その結果まで注意深く観察して確認することが大事であることも学ぶことができた。この経験が総長就任後の日々の仕事に大きな教訓となっている。

(名古屋大学総長)

「大学史」の光と影

副編集委員長 三 鬼 清一郎

当事者がみずからの過去を語ることは、たやすいようで意外とむつかしい。他人には知られたくないこともあるから、無意識のうちにそれを美化したり、厚化粧をほどこす場合もある。「大学史」もその例に漏れないであろう。この企画が具体化されはじめた頃には、何を明かにすることができれば、真の「名古屋大学史」たりうるかを考えていた。半世紀ほど以前に、戦争遂行に必要とされる技術者の育成を目的として、帝国大学という名を冠して出発し、戦後民主主義の潮流のなかで総合大学に脱皮したという経緯は、今日にもさまざまな形で影をおとしているよ